

令和6年度 保育園調査研究事業（研究報告）

1 施設名

こひつじ乳児保育園

2 研究テーマ

乳児期の「やりたい」思いを大切にし五感を育む

3 研究内容

（1）実施期間

令和6年4月～令和7年3月

（2）講師の所属・役職・氏名等

日本ゴダーイ協会会員 わらべうた講師 松本久美子

エール株式会社 体育指導員 小西 稜

（3）研究のねらい

乳児期に様々な経験（わらべうた、紙芝居、音楽あそび、運動遊び）をすることで、子どもの感覚がどのように育まれていくかを考察する。

（4）研究対象者

0歳児～2歳児

4 実践内容

①わらべうた・・・講師 松本久美子先生
クラスに入っていただきそれぞれの年齢に合わせたわらべうたを導入。職員にも指導していただき日々の保育の中で実践する。

②紙芝居・・・紙芝居台（舞台）を使うなど環境を整え、普段の絵本の読み聞かせとは違う感覚で紙芝居を伝える。

③音楽あそび・・・様々な楽器を使い音楽あそびや、リトミックに取り組む。

④運動遊び・・・講師 小西稜
定期的に講師に来ていただきリトミックの指導をしていただいていたが、今回職員全体の講習をしていただき、共有することができた。0歳児には曲に合わせて手をつくこと、1歳児には小さなマット一つでもルールのある身体を動かす遊びを知ることができた。また2歳児は鉄棒や平均台を使ってサーキット遊びの楽しさを教えていただき実践した。



5 研究のまとめ（研究成果）

①講師の声に耳を傾け自から参加する姿が見られた。保育士が講師に教えていただいたわらべうたを日々子どもたちに伝える事で一緒に体を揺らしたり手をたたくなど、保育士の真似をしようとする姿が見られた。

②紙芝居台（舞台）を置く位置などにも気をつけ、子ども達に読む中で舞台中心の紙芝居に引き付けられている姿が見られる。また子どもたち同士の共通体験が生まれ、楽しんでお話を聞く姿が見られた。

③様々な楽器を使い音楽遊びを取り組む事でリズム感がつき、日々の保育活動の中でも音楽を身近に感じて楽しむ様子が見られた。クリスマス祝会の中では曲に合わせ、鈴でリズムを奏でたり、歌うことで楽しむ姿を披露してくれた。

④0歳児の歌に合わせて手をつく遊びでは、転倒した時に手をつくことができるようにとの事で取り入れた。はじめは手をつくことが難しかった子どもも、歌に合わせて上手に手をつけるようになってきている。1歳児は室内にマットを敷き、三角マットを組み合わせよじ登る、滑る、バランスをとって歩くなどの動きを楽しんだ。はじめは上手く登れなかった子も繰り返し行うことで支えがなくてもできるようになり、「できた」が自信につながり意欲的に取り組む姿が見られた。また、ルールのある遊びの中で、「おひっこし」という掛け声で、離れたマットに移動するゲームも取り入れた。歩く、動物の真似をするなど色々なパターンも喜び取り組み友だちと一緒に身体を動かしながら、ルールを守り遊ぶことができるようになった。2歳児のサーキット遊びも同様に遊びを通してルールを守る事ができるようになり、成長が見られた。

6 課題

今回の取り組みの中で職員が意識をし、日々の保育の中で様々な遊びを取り入れ子ども達の成長が見られた。年齢、または月齢に合わせ、無理なく継続して子ども達に伝え保育に取り入れていけるよう職員同士が意識し保育に活用していきたいと思う。また、遊びの中でルールのある遊びをすることにより、保育士の話を聞く、友だちとの順番を待つ、勝った時の喜び、負けた時の悔しさなど、子ども達の成長につながると感じた。0歳児の継続を心掛け気持ちの成長と、身体の成長が育つ保育を行っていきたい。

令和6年度 保育園調査研究事業（研究報告）

1 施設名

すみのえひよこ保育園

2 研究テーマ

担当制の保育でのこどもの情緒育成を考察する

3 研究内容

（1）実施期間

令和6年4月令和～令和7年3月

（2）講師の所属・役職・氏名等

パフ代表

岩城敏之

（3）研究のねらい

育児担当制での育ちを考察する

（4）研究対象者

全園児

4 実践内容

- ・すみのえひよこ保育園、ポートタウンこども園、加茂保育園の0歳児～2歳児を対象に育児担当制を取り入れた事で、子どもにどのような変化があったかを意見交換した。

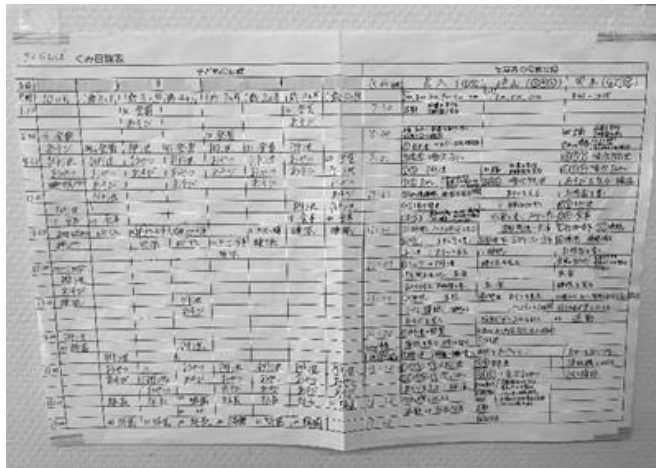
- ・岩城先生を講師に招き、育児担当制のあり方についての悩みなど相談したり解決法を学んだ。

- ・各園の保育現場を見に行き、各園の違いを把握し、岩城先生にも現場の状況をみてもらいより良い環境づくりや保育者の関わりについてその場で実践してもらい、アドバイスをもらった。



5 研究のまとめ（研究成果）

- ・ 育児担当制の目的は、生活自立を育てる・情緒の安定の2つであること。特に0歳児～2歳児までは丁寧に関わることが大切だと子どもの育ちを見て感じた。
- ・ 各園で育児担当制を取り入れる前と後での変化をととても感じたようだ。丁寧に関わっているからこそ、人見知りの子どもが他者が保育室に入ってきて泣かなくなったり、園生活に慣れることが早くなったなど、情緒のあんていを実感する場面が多くあった。
- ・ 子どもと密に関わることで子どもの興味ををより深く知ることができ、衣服の着脱がどこまで自分で出来るのか、食事の食べ方や好みなど、毎日みていないと分からない小さな変化や成長を育児担当制を取り入れているからこそ、気が付けることもありました。
- ・ 排泄、食事、睡眠の個々の時間や関わる保育者の動きが分かる日課表の活用し、毎日安定した育児担当制を取り入れたことで、保育者の急な休みにも対応できた。（写真参照）



The image shows a large, multi-column handwritten schedule chart. The columns are organized by age group (e.g., 0歳児, 1歳児, 2歳児) and time of day. It details daily routines such as meals, sleep, and play, along with the specific staff members assigned to each activity. The handwriting is in Japanese, and the chart appears to be a practical tool used in a nursery school setting.



6 課題

- ・ 育児担当制をより丁寧に取り入れるには、園全体の職員の配置や配置基準以上の職員確保が時期によって必要になる場合もあると思った。
- ・ 職員が育児担当制の必要性を学び、目的【生活自立を育てる・情緒の安定】を共通認識することが大切であると感じた。
- ・ 同じ目的に向かい、日々の保育で意識することで子どもへの言葉掛けや関わりが変わっていくと思う。

令和6年度 保育園調査研究事業（研究報告）

1 施設名

せいあい保育園

2 研究テーマ

子どもの心を育む自然環境づくり

3 研究内容

（1）実施期間

令和6年4月～令和7年3月

（2）講師の所属・役職・氏名等

京都女子大学非常勤講師 小泉造園 小泉昭男

大阪キリスト教短期大学 講師 津村樹里

（3）研究のねらい

子どもたちが自然と関わりながら五感を働かせ、命の営みを感じられる園庭環境を整えることを目的とする。京都女子大学の小泉先生や大阪キリスト教短期大学の津村先生の研修を受け、自然との関わりを深める学びを実践。保護者と共に「いちごの苗植え」「椎茸の栽培」「園庭への植樹」などを行い、自然と触れ合う機会を増やした。遊びや体験を通じて、子どもたちが自然の不思議さに気づき、豊かな心を育む園庭づくりを目指す。

（4）研究対象者

0・1・2歳の園児・保護者・保育士

4 実践内容

①□いちごの苗植え・・・いちごクイズやダンスを楽しみながら、いちごに親しみを持ち、親子でいちごの苗を植える体験を行いました。子どもと共に自然の大切さや収穫の喜びを感じてもらうことを目的としました。

②椎茸の原木運び・・・園での自然環境への取り組みに関心を持ってもらうため、保護者と一緒に裏庭まで椎茸の原木を運び、椎茸の生長過程について、イラストを用いて分かりやすく伝えました。原木の置き場所等は、小泉先生に相談、指導の下行いました。

③□コンポスト容器・・・子どもたちがお散歩で集めてきた落ち葉をどれくらい集まったか分かるように、一面だけビニールを張った段ボールに集めるように工夫し、落ち葉がたくさん溜まると、コンポスト容器に入れるようにしました。子どもたちは楽しんで落ち葉を集め、また、保護者の方にも見えるように玄関に置くことで、落ち葉のリサイクル（腐葉土作り）への関心を持ってもらえたのではないかと思います。

④□園児・園内での遊び・・・日々の保育の中で、園内での自然



遊びを改めて振り返り、草花だけでなく、風や光などの自然現象も子どもたちの遊びに取り入れ、さらに遊びの広がりを考えるようになりました。この研究に取り組んだことで、保育士たちの子どもの遊びに対する視点にも変化が見られました。また、研修を受けたことで、これまで以上に、子どもたちがどのように自然と関わり、その中で何を感じているのかに目を向けるようになり、遊びの中での学びを深く考えるきっかけとなる実践ができました。



5 研究のまとめ（研究成果）

①小泉先生の研修について・・・

遊びは生きるための遊びは生きるためのスキルであり、学びに欠かせない。特に自然遊びは科学的な学びを含み、園庭が生き物の集う空間であることが重要である。植物は季節の移ろいを伝え、子どもたちの時間間隔を育む。自然の中での遊びは、興味や関心を受け止め、生きた体験を通じて個性を育む。子どもが自ら環境を選べないからこそ、大人の関わりが重要であり、園庭は単なるグラウンドではなく、学びの場として整える必要があるということを学びました。

②津村先生の研修について・・・

津村先生の研修では、保育の目的や幼児期の成長を見据えながら、「どんな子どもに育ってほしいか」について考えました。特に「自然」に焦点を当て、子どもを取り巻く環境について議論を深めました。園や大学内の地図を活用し、植物や生き物、遊びの要素をグループで共有。この活動を通じて保育の基本事項を踏まえながら、ねらいの内容や展開について考察しました。今後、この学びを形にまとめ、保育の実践に活かしていきたいと考えています。2回目の研修では、園内や短大内の自然遊びマップ作成にむけて、どのようにまとめていくかを話し合い、「子どもの姿・場所・準備・方法」などの項目を整理しながら、具体的に書き込む作業を行いました。資料を作成することで情報を共有できるため、今後は保護者向けの資料としてだけでなく、保育者同士でも共有し活用できるものにしていきたいと思えます。日々の子どもの遊びがどのような学びに繋がっているのかを改めて実感出来る機会となりました。引き続き来年度も取り組んでいきたいと思えます。

③様々な取り組みについて・・・

乳児ということもあり、保護者と一緒に行う苗植えや原木運びといった取り組みが、保護者にとって自分事として楽しむひとときとなり、その後の植物の成長にも興味を持ってもらえたのではないかと思います。また園からのブログ発信やドキュメンテーションを通じて、子どもとの会話がなくなるきっかけになったのではないかと考えています。自然環境は、ただ遊ぶ場にとどまらず、乳児にとって心を育む大切な場所です。五感を使って自然を感じることで、心豊かな成長を遂げることができるよう、保育士、子ども、保護者と一緒にこれからも取り組みを続けていきたいと思えます。今後は園庭を学びの場としてさらに整備し、子どもたちが自然と触れ合いながら学べる環境を提供していきたいと考えています。

6 課題

「自然に親しめる四季を感じられる園庭」を目指し、職員で話し合いながら植樹する樹木を選定しました。しかし、植樹の適期が冬であることから、年度末の実施となり、今年度は十分に計画を進められなかった部分もありました。

一方で、職員間で既存の樹木とのバランスや、四季が重ならないような選定を慎重に行うことで、園の自然環境に対する理解をより深める機会にもなりました。また、2月末からしいたけの芽が少しずつ出始め、3月初めには収穫することができました。園のブログや掲示を通じて保護者の方々には報告しましたが、翌日の給食で提供する予定だったため、収穫したしいたけを直接見ていただく機会はありませんでした。今後も引き続き収穫が期待できるため、保護者の方々と情報を共有しながら、子どもたちとともに収穫の喜びを味わえる機会を大切にしていきたいと考えています。

令和6年度 保育園調査研究事業（研究報告）

1 施設名

つるみ保育園

2 研究テーマ

子どもの脳教育プログラムを通じて、自ら身体、心、脳の事を知り活用して、「自分も幸せ、地球も幸せ」に生きていくための学びに向かう力、人間性を向上させる

3 研究内容

（1）実施期間

令和6年4月～令和7年3月

（2）講師の所属・役職・氏名等

イルチブレインヨガ プレイントレーナー
金必錫先生 中村 仁美先生 斎藤 雅代先生

（3）研究のねらい

脳教育プログラムの専任講師にお越しいただき、4歳児以上に複数回受講してもらいました。この脳教育のブレイン体操、ブレイン瞑想を通して子どもたちに継続して主体的に考える子どもになることを目標とします。

（4）研究対象者

4歳・5歳児

4 実践内容

今回実施した脳教育プログラムは、専門講師にお越し頂き脳教育のブレイン体操を9回（保育士の講習と保護者参加の親子体験を含む）して頂きました。そのうちの2回は保護者にも参加出来る様に親子体験としました。子どもだけの脳教育ブレイン体操の場合、以下の順番で行います。

①初めに自分の体の中心、エネルギー原の丹田を認識する為、丹田を叩きその後、頭、手、足、背中等をなでたり、身体全体に刺激を与え自分の身体を感じ自分の身体体像のbody imageを認識します。
②エア縄跳びや風船あそびなどのゲームで友だちとの距離感、協力、ふれ合いを通じて一体感を感じます。
③最後、cool downで自分の身体、心、脳に戻り自分を認識します。自分の身体に集中する為に腹式呼吸をし、背筋を伸ばした状態であぐらをかき、頭にお手玉や絵本をのせて、静かに呼吸をします。
この一連の流れを通して頭がすっきりして集中力もアップします。そして周りの人達を感じ共感を呼びさします。子どもたちに体操の前と後に人型が書かれた用紙に自分の身体の状態の色を塗ったり白紙にうずまきを子どもたちに描いてもらい表現の仕方の違いをみました。また自分の頭で考えるということ子どもたちにわかりやすく伝えるために「のうちゃん」というキャラを用いて伝えていきます。自分の内面を感じ表現できる様にし、子ども同士のけんか、内省する時に自分の「のうちゃん」の声をききます。1/25の親子教室では、子ども44名大人40名が参加し講師の先生により一連の流れを保護者と一緒に行い後出しじゃんけんや風船を使った運動などしました。これはただ単に体操教室で体を動かしたというのとは違い親や友だちとふれ合う中で身体を動かすことにより、お互いを認め協力し、一つの共同体としての心の充実感、自己肯定感も上がりました。体験後に取ったアンケートでは「子どもから聞いていた丹田の経験など共有出来てよかった」「活発に動くことと落ち着く時間のメリハリが大切だと感じた」「体を動かしながら脳をマッサージしているような感じ」との意見も頂きました。そして「普段落着いて脳を使う事がなかった事を改めて感じた」「お手玉をとった後、重さが残っている感覚におどろいた」などの意見がありました。



5 研究のまとめ（研究成果）

資質能力の3つの柱のうち、心情、意欲、態度が育つ中でよりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」の資質能力が日常のストレスや回りの人の見え方環境の中で自分が持っている本来の力を出せていない状態から開放してくれるプログラムです。子どもたち、保護者、保育者全員が自分自身本来の自分の身体、心、脳を認識して大切にすることで自己肯定感も上がり回りの人々を大切にし、共生していける本来人間が持っている力を再び感じる事ができます。

脳教育プログラムで、心身のバランスを整え、脳の発達を促すことを目標としており、以下のような効果があらわれたと思います。

1. 脳の柔軟性向上：ブレイン体操で子どもが脳を使ったり、「のうちゃん」と会話することで、思考力や記憶力、創造性が向上し、学習能力全般に良い影響を与えました。
2. 集中力と注意力の向上：ブレイン体操と呼吸法を組み合わせることで、集中力や自己制御力を養うことができます。これは小学校にあげても学習の効率を高め、学校の成績向上にも寄与すると思います。
3. 情緒の安定：ストレスや不安を和らげ、感情のコントロール能力を高めることで、子どもの精神的な安定が図れます。心の平穏を保ちながら成長を支援します。
4. 身体と脳の連携強化：ブレインスポーツにより、脳と身体の協調を高め、身体感覚や運動能力を向上させます。これにより、運動神経の発達が促進され、手先の器用さやバランス感覚が向上しました。

結論として保育園児の情緒の安定や自己肯定感の向上に寄与していることが伺えました。プログラムを通じて、子どもたちは自分の感情や思いに向き合い、前向きな変化を遂げています。

6 課題

日々の生活の中でIT化が急激に進んだ事により、子ども達が日常生活の中で自分の身体を使う事が激減しています。その事により、心も脳も育つ機会が減っていることが現代社会の特徴だと考えています。この環境を踏まえた上で幼児教育では今まで生活の中で子ども達が自然に学んだ事も完成して学ばせていかなければならない時代に入ってきた様に感じておりまう。保育園では今まで以上に身体を使った遊びを行い、その事で心で感じる事、自ら考える事、行動したことで自信を持って生きていく事、他の人と協力、共生して人間らしさを育む環境が急務だと考えました。その一つの方法としてこの脳科学をもとに考えられた脳教育は有効な方法だと感じております。しかしそれらを子どもたちの中に継続していくには、導いていくトレーニングできる人材と小学校に行っても脳教育プログラムを出来る環境が持続できる様にしていく事が課題となるでしょう。

令和6年度 保育園調査研究事業（研究報告）

1 施設名

大阪市立清水保育所

2 研究テーマ

運動遊びを通して必要な身体の使い方、指導方法を知る． ・ 英語に触れる

3 研究内容

（1）実施期間

令和6年4月～令和7年3月

（2）講師の所属・役職・氏名等

沖サッカークラブ 小野寺 竜也コーチ・英語講師 吉本 圭子講師

株式会社ウエルネス 川口 拓真講師

（3）研究のねらい

・ 発達段階を踏まえた運動遊びが出来る環境を構成し、子どもたちは主体的に体の使い方を知り、ルールを守ろうとする。保育士はその指導方法を学ぶ。歌や、ダンスと共に、英語に触れることにより、英語が身近なものとして、感じられる環境構成を行う。

（4）研究対象者

5歳児・4歳児・3歳児

4 実践内容

【サッカー遊び】 門真市にある、少年サッカークラブのコーチによるサッカー遊び。5歳児23人50分間 月2回 1人1球、サッカーボールを使って遊ぶ。

【ウエルネス】 株式会社ウエルネスに依頼し、3歳児30分、4歳児40分、5歳児50分 発達に応じて、いろいろな運動遊びを経験する。

【英語遊び】 英語教室の講師による50分の英語遊び。月1回、4歳児と5歳児それぞれのクラスで実施。



5 研究のまとめ（研究成果）

【サッカー遊び】 5歳児23人50分間 サッカー遊びを通じてルールや体の使い方を楽しみながら知る 年度末には、法人内サッカー大会を行い、チームで試合に参加する楽しさを知る。

【ウエルネス】 3歳児30分、3歳児40分、5歳児50分 発達に応じて、身体の使い方を知る。 ○3歳児 非日常的な動きの経験をする 体操や、ふれあい遊び、サーキット運動を通して、体の使い方を知り、身体を動かすことの楽しさを経験する。

○4歳児 少し負荷のある動き 体操や、ふれあい遊び、サーキット運動を通して いろいろな運動遊びを楽しみながら 集団ゲームで人と協力することを知る。

○5歳児 連続動作の習得及び技能 体操や、ふれあい遊び、サーキット運動を通して いろいろな運動遊びを楽しみながら 集団ゲームで人と協力することを知る。

【英語遊び】 歌やダンスなど、わかりやすく英語に触れ、興味を持つことができる機会を経験することで、新しい体験を通して視野を広げる事が出来た。

6 課題

研究を始めた時には、ウエルネスの運動遊びの日程調整が上手くいかず、計画していたように、実施する事が出来なかった為、英語遊びも含めて、子どもたちにいろいろな経験をする機会を増やし、子どもたちの興味関心を引き出すことが出来たと思う。選択肢を増やすことで、子どもたちが主体的に好きなものを選ぶことが出来る機会にもなった。今後計画的に運動遊びを取り入れることで、子どもたちが体の使い方を知り、それにより怪我しにくい体づくりにつながれば良いと思う。また、職員も専門家の指導を見ることで、指導方法を学ぶ機会にもなると思う。